△花は紅柳は綠　△阿諛諂佞　△友の善事　△奇異の觀

凡て物は何程善くても惡いといふことはないが、さて之でよいといふ完全無缺なものはない。梅は薫りはよいが、花は美しからず。櫻の花は麗しいが、香は宜しくない。それなら柳の枝に櫻の花を咲かせて、梅が香を持たせたならば、理想的でよからうが、そんなものはこの世の中にはない。梅は梅、櫻は櫻、柳は柳でよい。若し缺點を求めて之を棄てたなら、天下に何も取るべきものがなくなるであらう。又世の中には全然無用の長物もないから、一技一藝を求めて之を用ひたなら、天下に棄つべきものはないであらう。須らく物は一善を以て一切を取らず、一惡を以て一切を棄てゝはならぬ。

花は紅柳は綠

小人は人の長短兩面を知るや、長所を其人の面前に褒めて、之に媚び諂ひ、其短所を捉へて蔭に惡口するものである。苟くも聖道の行者は斯の如き小人的行爲があつてはならぬ。

阿諛諂佞

他人の佞色諂笑するものを見ては、與に坐して語るにさへ堪へぬものであるに、己れ却つて阿諛諂佞致さゞることなく、恰も、幇間の顧客に對するが如く、巧言令色其人の長所を褒め立て、只管其人の甘心を得るに、汲々たるものがある、甚しきは、權貴に請托せんとして、其閨門に媚び、賄賂を贈り、其頤使に甘んじ、猶足らずして、其婢僕に諂ひ、己代りて其勞役を執るに至つては、見苦しさも通り越して、沙汰の限りではないか。

其人の長所を褒めんとならば、宜しく蔭にて之を賞揚すのでなくてはならぬ。蔭にて人を褒むる人は、己も又他より蔭にて褒めらる。友の善事を蔭にて語り、人の卓越したる技能を蔭にて吹聽するは、傍に聽く者も又快いものである。

友の善事

他人の惡口を語るものは、必ず他に於て又他の人の惡口を語る者である。斯る人は互に警戒するの必要ある如く、己れ自身が斯樣な人となつてはならぬ。

奇異の觀

若し茲に己を誤解する一人の敵ありと假定せよ。其敵の蔭に於て、彼の攻擊する口を以て、彼の長所と、彼れの技量とを褒めよ、何時の機會か此言彼の耳に入るのとき、必ず彼れは奇異の觀に打たれるであらう。斯くすること度重なるに從つて自己を悟り、遂には誤解たりし事を悔い、彼より厚き握手を求めに來ることゝなる。此時の痛快は一通りではないのである。

第八十八章　吝嗇

一、猜疑と吝嗇は最も憎むべき行爲と心得よ

△意志の疏通を缺き　△無關惜しい　△同情心なく

猜疑とは、うたがふ事である。何人を見ても、何者を見ても、最初から色眼鏡をかけて見る、之を猜疑心の深い人と云ふ。人を見るに、猜疑の眼を以て見るは、第一無禮であり、小心であり、卑怯であり、最も劣等な精神であつて、憎むべき行爲の一つである。

意志の疏通を缺く

猜疑心の深き人は、必ず他と共同の事業に携はることは絶對に出來ぬ。疑ひの心強きが爲に、共同者を信用するの力乏しく、事業牢途にして、意志の疏通を缺き、遂には分離するに至る。斯る人は、他人と共同の事業に關係するの力なきのみならず、有力なる使用人を使用するの能力なく、親子の間にも、夫婦の間にも、常に冷たき空氣が通ふやうになり、自然に不和を生じ、長上には見捨てられ、配下には退かれ、同僚には指彈され、遂には、身の置所なきに至るであらう。聖道の上には猜疑は敵國である、猜疑心厚き者は神の恩寵も自然に薄らぎ、一生涯を不運に終るのである。

無關惜しい

吝嗇とは、喰ふものも相當のものを喰はず、衣るものも身分相應のものを着ず、住むべき家も身分に相應したる所に居らず、遣ふべき金も使はず、施すべき時にも、施すことを知らず、無闇に惜しい、欲しいの一點張りで、世間の交際もせず、唯々我慾の爲に蓄財するの外、道を知らざる輩、即ち之を云ふのである。

吝嗇と節儉とは、外面一寸似たりと雖も、其性質内容に至りては、天地の差あるものにして、決して似通うたものではない。節儉家は他人に尊まれ、吝嗇家は他人に卑められ、遠ざけられ、猜疑家と同じ運命に陷るのが普通である。

同情心なく

節儉は自己の欲を節して、貯蓄し、之を有用に使ひ、慈善に施し、社會の爲に活用する、故に節儉は、人の行爲上大事の事で、自他共に奬勵すべき事柄であるが、吝嗇家は貪慾深くして、他のことを知らず、他人が迷惑しようが、同胞が苦まうが、親戚が困窮しようが更に同情心なく、人にも使はせず、自らも使はず、金錢を自己の名義の下に、集めたるだけのことで、能事足れりとして、世を辭するのである。吾人道に入るものは、猜疑、吝嗇、此の二者の有害無益にして、厭び憎むべき性質のものなることを心得ねばならぬ。

第八十九章　賞罰

一、大神靈の賞罰は眞に公平にして、漏らすところなし、歡喜すると共に恐懼せよ

△惡行は罰する　△神は見通しである　△遺傳的天刑　△白内障　△血友病　△發明家　△鳶が烏を生んだ　△智識の力　△色彩に變化を生ず　△力士の體格

神の賞罰と云ふは、實に公平なものである。神の賞罰は如何なる賢人も智者も之を脱るゝものでない。人は能く、神様は我々を守護はして下さるが、決して罰をおあてになるものでない、なぞと廣言するものがある者なれど、若し神が賞のみ與へて、罰を忘れて居られるならば、世の中は闇黑である。善行には賞與し、惡行は罰する。此法則は大古から今日迄少しも異る事なき、一定不變の神の道である。惡人が己の犯したる罪を蔽はんとして苦心をなし、國家の法律は或る程度迄脱れる事が出來ても、神罰は脱れることの出來ないものである。故に公平なる事を神聖と云ふ。神の賞罰は覿面に即時來ることもあり永き年月を經て來ることもあるが、如何にしても免るゝことの出來ぬものなるが故に、善人は之を喜ばねばならぬ。己のなしたる善事は決して他人に認められなくともよい、明るきも暗きも遠きも近きも、神は見通しであるから、一事一行吾等の行動を御覽遊されて居るから、一として帳落ちがないのである。之故に善人は一善をなす事に、神の公平の明かなるを歡喜して、心から感謝し、又次の善行をなすべきである。之に反し若し心の狂ひより道を踏み違へたり、惡事をなしたる場合は早速悔悟して、神に懺悔し、謝罪し、罪の宥しを受けねばならぬ、若しも之を等閑になし置かば再びとりかへしのつかぬ、神罰を受けるものであるから、神罰程恐ろしいものはないと云ふ事を心得ねばならぬ。元來不仕合とか、不幸續きとか、又は病氣なぞは、悉く神の罰である。之等を神の罰にあらずと云ふものは、既に神の罰に依り

惡行は罰する

神は見通しである

神の公平なることも、神の難有さも、知る事が出來ぬのである。

天刑と稱するものも、即座に受ける天刑は輕くてよいが、大なる天罰となると、容易に急には來ない、其代りに子孫代々に迄其天罰を負はねばならぬ事がいくらもある。心掛ける上にも注意せねばならない。今茲に科學上より見たる、遺傳的天刑の環境を述べて見よう。

遺傳的天刑

肺病や癩病を天刑病なりとは何人も知る處であるか、肺病や癩病許りでない、總ての病氣は皆天刑病である。何故に肺病や癩病のみを指して天刑病なりと云ふか、汗は遺傳的のものであるからであらう。遺傳病と云ふならば遺傳病は肺や癩許りでない、先づ體質の强壯と虚弱とは明かな遺傳であり、親の身體の何處かに他に類のない特別の畸形があると、其畸形が極めて明瞭に子孫に現るゝものである。其他二三の主なる例を擧げて見ようならば、兎唇、短指、多指、裂手、裂足等であつて、兎唇とは俗に三ツ口の事で、短指とは指の關節が普通の人よりも一節足りない爲に何れも指が短いのである。多指とは普通六本指の事で、六本以上ある事もある。裂手裂足とは指が二本か三本しかなく、即ち普通よりも指の數が足りない場合を云ふのである。是等は皆遺傳的の天刑である。

最近獨逸の學者の研究に由ると遺傳する疾病は三十種位あるとの事であるが、其二三を擧げて見ると、夜盲、聾、啞、(以上は劣性)尿崩、早期禿頭、短壽などで、之等の患者は必ず直接系統

を引いて遺傳して居る。

白内障

右の外に白内障と云ふ眼病があるが、此の病は眼球内の水晶體が白く曇る爲に物が見えなくなる病である。之も系圖に顯はれた記錄を見ると、此の病に罹る人々は皆此病に罹つた子孫であつて、而かも正しく神罰の大なるものである。

血友病

此外にも天刑の遺傳病は、色盲や血友病が夫である。色盲とは赤と綠の見分けのつかぬ病氣で、日本人は學校や軍隊で嚴格な檢査をするから誰でも知つて居る處である。血友病とは血液本來の特有性たる、凝固作用の不充分な病で、元來體内にある血液は、害傷の爲に傷口から外部に流出した時空氣に觸れると忽ち凝固して、傷口から血液の多量に出るのを防ぐ樣になつて居るものである。然るに前述の通り此の血友病の患者の血液は、凝結作用が不充分な爲めに、極輕少な傷口からでも無制限に出血して遂に生命に關係する樣な事になつて來る、實に危險な病である。而して此の色盲と血友病との遺傳は他の遺傳と違つて、男子にはあるが女子には殆んどないのである。故に此の疾患を有する男と普通の女とに出來た女の子には此等の病は殆んど現はれない。併しながら、此女の子に顯はれないからと云ふて、從來の遺傳が中絶して無くなつたと思ふと大間違ひである。之は卽ち、女の體質内に該病が隱在して居るのであつて、若し此の女が他の普通の男子と結婚して其間に出來る男の子には該病の患者が生れるのである。

發明家

次に精神的方面の遺傳は、低能、白痴、犯罪者、精神病者、神經衰弱者、天才的智者等の遺傳であつて、低能や白痴の者の系圖を歐米の學者が調べた處を見ると、必ず親なり、親族なりに低能、白痴又は他の變質者があつて、遺傳が其主なる原因であると云ふ事がわかる。又之に反し學問技藝等の優れた人々の系圖を調べて見ると、發明家、天才家の家系からは多くの發明家、天才家を出して居る。藝術家の家系からは又多くの藝術家を出して居る事も事實である。又精神病者や、神經衰弱者の系圖を調べて見ると、右と同樣に遺傳に由るものが多い。之等も皆天刑中の大なるものであるから、自分で犯した罪の罰が急速に來ないからとて安神の出來るものでない。大なる天罰は一度受けた以上、子々孫々に其天罰を繼續しなければならないのであるから懼れても尙恐れざるを得ないのである。

極めて簡單ではあつたが、此處まで說明して來ると遺傳と云ふ天罰の甚だ恐ろしいもので、人の子の親となつても其子供の成長するにつれて配偶者問題が心配に爲つて來る。併し萬物は神の力に依つて常に進化しつゝあるものであるから、之を支配し給ふ處の神は一方に於て遺傳と云ふ大なる原則を與へ給ふと共に、又他の一方に於て進化の根本原則とも云ふべき、變異と云ふ法則を與へて其天刑から無事に放免して下さる事が出來て居るから、何時も神に懺悔し神に縋り神の宥恕を求めて、神の力に由て一日も早く助からねばならぬのである。

「蛙の子は蛙」と云ふ言葉のある樣に、人間の子は人間であつて、決して蛙の子に人間が出來たり、人間の子に蛙や犬が生るゝ事はない。然るに此處に不思議な事は、親子兄弟が同じ血を受けながら皆異つて居る事である。同じ親から生れても、兄弟が全く見分のつかぬ程似て居る事は殆んどないのみならず、中には「鳶か鷹を生んだ」と云ふ程異つて居るものもある。之は人間許りでなく一切の生物は何れも皆其通りである。斯樣に同一種の生物の各個體が親子兄弟と雖も多少皆相異つて居る事を生物の變異性と云ふのである。其處で生物は此の變異性と云ふものがあるから、或程度迄遺傳を破壞して新しい物を造りつゝ進化して行く事が出來るのである。故に我々の親の祖先に缺點があつたとしても、我々の精神や意志や、智識の力で立派に改良して行く事が出來る代りに、又親や祖先が苦辛して造つて置いてくれた善良なる特質も、我々の心掛け一つで墮落させる事も出來る次第である。

鳶が鳥を生んだ

智識の力

色彩に變化を生ず

さて然らば其變異は何の位の程度まで出來るかと云ふに、人間でも動植物でも飴細工でないから、さう自由自在に變化させる事は出來るものではないが、優秀なる敎育、善良なる環境は惡遺傳を持つた人も別人の樣に仕上げる事も出來るのである。

神の威力に依り生物が變異して行く狀態を、二三の例を引證して說明して見ると、同じ動物の上でも、食物を變へて養ふと形狀色彩に變化を生ずるものがある。例へば日本の「目白」と云ふ鳥に一年程每日々々甘藷を與へて養つて置くと羽の色が黑く變化して來たり、「カナリヤ」や「鷄」に胡椒を食はせると羽毛が樺色になつて來たりする。又蝶や甲蟲の樣なものは溫度の如何に因つて著しい變化を來たすものである。又櫻草の一品種の如きは攝氏三十度では赤色の花を開くが、二十度では白色の花が咲くと云ふ樣な奇異な現象を呈するものである　又場所の如何に因つて變異するもの、例を擧げて見ると、植物では秋田の蕗や、櫻島の大根や、朝鮮人蔘を東京や大阪地方へ移植しても秋田や櫻島の樣な大きなものは出來ず、朝鮮の開城產人蔘の樣な强烈な精分をもつた藥用人蔘は決して出來ないのである。又メキシコ產の山椒魚は陸上に養うて置くと鰓がなくなり、尾が細くなつて來て、全然陸上の動物となつて仕まふ。人間でもさうである。力を主とする力士の體格と刺繡屋の師匠さんの體格とを比較して見ると、兩者の出發點卽ち小兒の時代は大體に於て同じ位であつたにも關らず、成人の後は仁王樣と小人島の人種程異つてしまふのである。

秋田の蕗

力士の體格

精神的方面の變異に於ても之と少しも異はない。

是は有名な話しであるが米國のニューヨーク州の森林地帶にジュークスと云ふ惡血統がある。此の系統の七百人の中、百六人は私生兒、百四十六人は乞食、六十四人は養育院に養はれ、百八十一人は賣春婦七十六人は犯罪者、其中七人は殺人犯であつた。此の一族の爲にニューヨーク州は二百五十萬弗(卽ち日貨五百萬圓)の金を費やしたと云ふ事である。之に依つて見ると遺傳は絕

養育院

對的のもの〻樣にも思はれるが、併し此の第八番目の子孫に三人の姉妹があつて、年長の二人は賤業婦で末の妹のみが或る宗教家に引取られ、一心に神を祈り神を信じ日常の行を改め、善良なる家庭の教育を受けた爲に、全く神に救はれ後には立派な婦人となつて、善良なる血統を作り出したと云ふ事實談がある。

海上生活

教育と云ふもの〻實に恐ろしいものである事は玆にも又一つの例がある。同じく〻アメリカの或る片田舍の農家に、一人の婦人が三人の子供を引き受けて、夫に死なれてしまつたので、女の手一つで非常な苦辛を爲ながら之を養育しつ〻あつた處が、先づ年長の兄が母の反對たるに關らず、海上の生活は實に壯快なものであつて、世に男兒と生れて海上生活へ身を投ずる事の出來ぬものは、人生の最大幸福を知らぬものであるなどと面白い古事や傳說を引き來つて、母親の心を引く樣に物語つたものだから、母も愛兒のいとも熱心なる要求にほだされて、止むを得ず之を許した。然るに次男も三男も、年頃になると相次で同樣に海上生活を希望した。母親の考ではせめて三男だけは、自分の老後の話相手に陸上の生活に從事せしめたいと思つて居つたのに、此始末であるから非常に驚き悲しみ乍ら、或る牧師の處へ三男の素志を飜へす可く盡力してくれる樣に賴みに行つた。之には牧師も大に同情して、何とか盡力してやらうと思つて其母の家に來た。而して其母の室にか〻つて居た一幅の油繪を見て、三人の子供が海へ〳〵と憧がれて行く謎を解いたと云ふ

一幅の油繪

裸體美人の繪畫

事である。

其繪には何が書いてあつたかと云ふと、蒼々として晴れ渡つた天空と、渺茫たる大海原の眞只中に、滿風を帆に孕らんで、白雪の如き波濤を蹴破りつ〻、いかにも心地よげに、走つて居る一隻の帆船の繪であつた。其男ましい光景と、森玄雄大なる大自然の風致とは、朝に夕に彼等三人の小兒の幼心をして、海へ〳〵と憧れしめたのであつた。而かも彼等の祖先は代々水飲百姓で、海上の生活などは緣故のあるものではなかつたのである。

四圍の環境と云ふものは實に偉大な力を持つて居るものである。裸體美人の繪畫などを室內に掛けて置いて……新しき藝術に憧れ行く〻吾等新人は……などと新たらしがる近頃の紳士の家庭に、不良少年の續出するは當然の事である。

實に吾々人間には天與の變異性と云ふものを神よりお與へになつて、恒に進化の道線を辿りつ〻あるものである。然れども進むも退くも天刑を受ける、天刑を免るゝも、我々人間の覺悟一つにあるのであるから、朝に夕に聖道を聞き德を養つて、自らを善良なる環境の中に投ずると同時に、神より與へらるゝ天賞を得て、我々の子孫の環境をも善良なるものとして、子孫の爲め、國家の將來の爲め、又社會全般の爲め、吾等大和民族の爲め、善良なる遺傳單位を創造して行かねばならぬ。

第九十章　神護

一、世論の駁撃は盡くる事あるも神の加護に依る事業は絶ゆる時なしと知れ

△世人の誤解　△偉人ではない　△眞理の光り　△刀杖の難

偉人は惡評の標的なりと云ふ語があるが、人間が偉くなれば偉くなるほど、人から誤解され易く、猜まれ易く、惡口せられ勝のものである。偉人のなすことに幾多の矛盾あり、撞着あるは事實であるが、其矛盾撞着を平然として成し遂げて行く處に、偉人の偉人たる所以が存して居る。

己が信ずる處を言ひ、己が信ずる處を行ふに躊躇してはならぬ。これを成しこれを行ふ處に偉大が加はつて行くのである。その行動言語に對して、世人の誤解の生ずるが如きは、是れ何の關する處がある。『誤解さるゝは、我偉大なるなり』と知るべきである。基督も誤解された、ソクラテスも誤解された、日蓮も誤解された、林子平も誤解された、吉田松陰も西郷南洲も又誤解された。之等の誤解された人々は皆その生命にまで危害を蒙るに到つたのである。しかも彼等は平然として、その所信を貫いて行つた。偉大となるは誤解せらるゝなりで、偉人はすべて世の誤解を受けて居る。これは偉人の矛盾撞着せるが故ではなく、世人の愚昧なるが故である。

世人の誤解

偉人ではない

眞理の光り

刀杖の難

世の誤解を恐れて、あゝ云はれはしないか、斯う云はれはしないか、なぞとびくくしながら、言つたり行つたりするやうな人は、これ決して偉人ではない。又偉大なる人物となることも出來ぬ。眞理の光りは決して亡びるものではない。神の加護に依る事業は盡きることのあるものではない。眼前一時の誤解の如きは問題ではない。誤解せらるゝを恐れて、自己の眞面目を抑へるが如きは、是れ世を欺くものである。またこれ自己を殺すものである。偉人と偉業には、誤解は付きものであるが、世論の駁撃は一時的であつて必ず盡きるものである。原野を蔽うた雲霧も次第に太陽の光りに散じて、總ての物體が明かに顯るゝ如く、眞理の光りに愈々明々光々と輝きて、其眞價を發揮するときが來るのである。故に道人は常に眞理に卽くの勇氣がなければならぬ。

反對もなく、駁撃もなき事業は、例令成功したりとも面白味も愉快もないものである。平凡ならざる事業は、必ず種々なる障碍に遭遇する、而して其障碍も事業の大なるに比例して又大であるべき筈である。此難關を突破して彼岸に達したるときの、喜びと面白味は、尋常人の窺知することの出來ぬ偉大なるものがある、一難來る毎に、一擊を受くる毎に、神に感謝し喜悅し、勇みに勇み喜びに悅びて、邁進すべきである。

基督敎の隆盛は、あらゆる强烈なる駁撃と迫害とに依り、遂には十字架の慘を見たところに基因し、日蓮宗の勃興は或時は燒打に逢ひ、或時は刀杖の難を加へられ、或時は流刑に處せられ、

言語に絶したる危害と駁撃とに依つて苦しめられたるも、大神靈の加護に依る、聖業であるが故に斷じて絶ゆることなく、益々榮えるのである。獨り宗教ばかりに止まらぬ、人事百般何事に於ても、正しきは榮え邪なるは亡びるのが眞理である。邪道に於て或る程度迄は非常に發達することもあり、正道に於ても世の誤解を受くるものであるが、正道は永遠に絶滅の期なきものである。故に事業を營むにも、宗教を信ずるにも正邪の區別を充分に研究して、聖道にあらざれば與せぬだけの心掛けがなくてはならぬ。

第九十一章　祈念

一、大神靈は弱き者、惱める者を救ひ給ふ、信仰を厚うして強き力を得よ

△奇蹟のない宗教はない　△日蓮上人　△宗教を放棄　△寛術ごもなく　△風と濤との威力　△萬物の靈長　△剛者とならしめ

神の御威力は何人にも與へ給ふ無限のものであるが、殊に信仰の念厚きものに對し、特別の威力を示し給ふ。弱き者には強き力を與へられ、惱めるものは、其の苦惱を拂ひ去らしめ給ふのである。

奇蹟のない宗教はない

孰れの宗教にも奇蹟なるものがある。佛教にも、回々教にも、基督教にも、日蓮宗にも、眞言宗にも、神道にも、奇蹟のない宗教は尠ないと云つてよい。或は釋迦が中天を翔つて父の病を見舞つたとか、或はモハメットが粘土を以て小鳥を造り、之に向つて手を拍つたれば、土製の小鳥に魂が這入つて、眞の鳥と化して飛び去つたとか、其外にも種々奇妙なる話は澤山ある。基督教にも亦之に似寄た話がある。基督が「カナ」の酒宴に於て水を變じて葡萄酒と爲したとか、又は五つのパンと二つの魚とを以て、五千人の人を飽かしめたとか、生來の盲目者の眼を開きしとか、ベタニヤに於て、ラザロと云ふ人を死より蘇生さしたとか、聖書の中には澤山の奇蹟が記されて居る。

日蓮上人

日蓮上人は鎌倉幕府の命に依り、當に斬首の刑に逢はんとしたとき、俄に雷鳴轟き渡り、刀身は寸斷され、死を免れたとか、或は海中の巖上に置かれたるも、滿潮時に漁船の助くるところとなつたとか、澤山の奇蹟がある、弘法大師にしても、唐の國より天空に向つて投げた獨鈷は高野山に落ちたとか、死に瀕したる病者が、彼の衣に縋りて直に恢復したとか、焔々たる火事を九字秘法に依つて消したとか、是にも澤山の奇蹟的傳説がある。

吾等は之等の奇蹟を信ずるものである。而して世間の多くは之を迷信と稱して笑ふのである。

宗教を放棄

魔術でもなく

現今の如く學術の進歩したる世に生れ來て、奇蹟を信ずるなどとは以ての外の事であつて、別して歐洲風の新教育を受けたるものが、之を信ずるなどゝは沙汰の限りであると評する者もある。英國のマイケル、フハラデーの如き有名な科學者は熱心なる基督教信者であつて、此奇蹟を最も深く信ずるの一人であるが、日本では一般に學者となれば、宗教を放棄せねばならないやうに思はれて居るやうである。吾等が之を信ずべきものなりと云へば、學者先生達、否學者や先生許りでなく、中學校位で理科學の教授でも受けた者は直きに時世後の教のやうに思ひ、「若し奇蹟が本當ならば自然の法則は如何する」と、科學と宗教とは一致すべからざるものであるやうに誤解して彼れ是れ口にするものである。

然し吾等は確かに奇蹟を信ずるものである。奇蹟とは奇話ではない、不思議でもなんでもない事を觀察者の謬見からして奇蹟と認めたものではない。奇蹟は奇術でもなく、魔術でもなく、進歩したる學術の應用でもなく、威嚇に出でたものでもない。然らば奇蹟とは、何であるかと云ふに、奇蹟とは神の事蹟であると云ふ迄である。即ち宇宙を造ひ給ひし神がなし給ふ業であるのである。人間には奇蹟は出來るものでないが、特なる神の援助を得るに及んで此の奇蹟を顯はすことが出來る。何故なれば、彼自身の位置が自然界の一部分であるのみならず、彼は彼の墮落に依て彼の能力の大部分を失つて居るから奇蹟を顯はすことが出來ぬ。若し吾人の行動が神の御心と同一になつて來たならば、奇蹟を顯はすことは何んでもない筈である。一般に私は神を信じますが、奇蹟丈けは信じませんと云ふ者がある。之れは眞に神を信じない人の云ふことである。奇蹟を信じない人に、神の靈驗を享ける事は出來ぬ。奇蹟を信じない者に神を眞に難有いことを知る事は不可能である。若し玆に世間一部の人の言ふ如く、奇蹟は全くない者とするならば、取りも直さず、宗教上の信仰を其根本より破毀することである。宗教が世に存在する理由、即ち吾等が之を要求する理由は、其超自然的、超人間的の勢力があるからである。若し自然以上に吾等の頼るべき勢力が無いならば、我等は科學さへ研究すれば別に宗教を學ぶの必要がないことになる。若し又人より外に頼むべきの存在者が無いとならば、吾人は如何程人世の無情を唱へても無益の事である。人の天性が自づと宗教を要求する所以は、彼れに自づと超自然的の勢力即ち奇蹟のある事を信ずるの本心があるからである。

風と濤との威力

奇蹟はないものだと云ふことが出來ようか、大海の眞中に在つて大風波を卷き、怒濤山を築く時に、我等ば風と濤との威力に屈服し、終に悲鳴一聲海底の藻屑となつて失せるのであるか、宇宙廣しと雖も其中に風を支配するの權は無いのであるか、海を縛るの力はないのであるか、我々人間たるものは、水を怕れ、火を怕れ、風に屈し、山に畏ぢて蹙々として一生を終るべきであるか。彼の信仰のなき人が黑雲の山の端に懸るを見れば、暴風の來つて、彼の生命と財産とを奪ひ

萬物の靈長

剛者とならしめ

去らん事を恐れ、新聞紙に地球と彗星との衝突ありと云ふ豫報のあるを讀めば忽然として、家族四散心身滅絶するを慮ひ煩ふが如きは、果して萬物の靈長たる者の爲すべき事なるか。神の存在を知らず、神の偉大なる能力を信ぜざればこそ、人は品性を下げて自然の奴隷となり、其暴威に屈服し、其劫掠を恐れ、厄運其身に迫り來つた際には、理學萬能を唱へつゝある人が、却つて賣卜者に往て判斷を乞ひ、俄かに九星術を見て貰ふ事のあるは抑も何故であるか、自然以上の力を信じない人は、彼に學問のあるなしに關はらず、終には自然の奴隷と成り下るものではないか。素と我々人間たるものは天然を利用すべきものであつて、決して之に服從すべきものではない。奇蹟を信ずるに至つて、始めて我々は天然の上に立ち得るものとなるのである。

神の顯はし給ふ奇蹟を否定するは、奇蹟其者に接したことのない證據である。奇蹟其者を知らざる故である。自分が知らないからと云うて、無いものとすることは出來ぬ。鰻の味は食うたことのある人のみ之を知ることが出來る。食はざるが故に無しと否定するは誤りも甚しきもので、言ひかへれば此點に就て無智なるが故である。無智を廣言することは大した誇りとならぬのである。

神居ますと信じ、奇蹟あるべしと信じ、而して心を正しくして祈念するなれば、神は何時にても弱き者に對し、强き力を惠み給ひ、剛者となさしめ、心に惱みあるもの、身に惱みあるものも等しく救はせ給ひ、大なる力を與へ給ふものである。論より證據、醫者も藥も最早些の效力なしとして、總ての人に見放されたる重病患者が、信仰の德に倚りて救はれ、健康體に復して、再び國家社會の爲に活動したものは、昔も今も日本にも外國にも澤山にあるではないか。

第九十二章　心眼

一、知覺者は盲目なりとも心眼を以て見ることを得るものと知れ

△形式に囚はれ　△活ける眞の自己　△自己を生かし　△鳳譚　△伏見人形　△性を見る眼　△この心の耳を開け

神靈教は聖道を研究して、知覺者となるの道である。知覺とは悟道のことで、悟り得れば盲者と雖も心の眼を開きて、總ての本心を見ることが出來るのである。

昔し一休和尚が子供の時分、師匠の和尚さんに連れられて、檀家の法事に出かけた事がある。その時一休は浴衣のまゝであつたので、その家の主人が見て、この小僧一つ苦しめて、常々の小

才を抑へてやらうと云ふ惡戯心を起し、ワザとからかつて。

『コラッ、小僧さんの癖に法衣を着て來ないといふ法があるか』。と叱り付けた、すると一休平然たるもので。

着て來たぞ本來空の墨衣
　袖長からで人こそ知らね

と一首の和歌を以て主人をやりこめた。

こは一場の頓智奇談に過ぎないが、然し此の和歌こそは、大に味ふべきものである。

今の世の人は法衣をつけて居なければ、僧侶だと思はぬものが多い。軍服を着て居なければ軍人と合點せぬ。自動車に乘らなければ偉いものだと思はぬ。即ち形式に囚はれて、其內面の實際を考へないのである。僧侶は法衣を着すべきもの、軍人は軍服を纏ふべきもの、金持は自動車に乘るべきものと合點して、金持が若し自動車に乘つて居なければ、忽ち貧乏になつたのだと速斷して了ふ。しかし、これは兎に角、第三者が他人を批評する眼であるが、これを主格の側から見て、實に驚き呆れざるを得ないものがある。自分が僧侶の身でありながら、法衣を着て居るときだけ、僧侶らしく振舞ひ、法衣を脫すれば俗人となつて了ふ。これ呆れざるべからざることである。軍服を纏ひ、軍帽を戴いて居るときだけ軍人であつて、之を脫すれば軍人でない連中がある。

形式に囚はれ

實業家にも、宗教家にも、教育家にも、藝術家にも、みなかゝる事實が認められるのは、唾棄すべきことである。

法衣を着して居るときだけが僧侶ではない。軍服を纏うて居るときだけが軍人ではない。法衣を脫するも僧侶は僧侶である。軍服を纏うて居るときだけが軍人ではない。軍服を脫いでも軍人は軍人である。丸髷を解いても尼になつても、人妻は人妻である。人間は外形外觀の色の體裁を超越しなければならぬ。本來空の黑衣を纏うて居なければならない。即ち、人は何時如何なる時と雖も、眞面目なる生ける眞の自己を發揮しなければならない。

活ける眞の自己

本來空の黑衣は袖が長くないばかりに、人の眼には見えぬ。されど、人はこの眼に見えぬ、本來空の黑衣を見るだけの眼を養はなければならぬ、持たなければならぬ。外觀によりて人を判斷せずして、內より見て、人を評價しなければならぬ。他人を見るばかりでなく、自己を生かし、自己を發揮するにも、この活眼がなければ駄目である。見渡せば、世上形式に囚はれたる人のみ徒に多くして、本來空の黑衣を見得る人は殆んど皆無である。而して

自己を生かし

着て來たぞ本來空の墨衣、袖長からで人こそ見えね、と叫び得る人に至つては、更に更に少いのである。

昔、比叡山に大知識が居つた。或時一山の僧徒を集めて、その蘊蓄を傾倒しようと、佛典の講

義を始めた。

彼の大知識の講義を聽き漏らしてはならぬといふので、萬事を放擲して講堂に來り集まつたもの數千人、流石の廣き講堂も立錐の餘地がなかつた。然しその翌日になると、聽衆が減じた、その翌日になると更に減じた。かくして終には廣き講堂の中には、たつた一人の若僧が殘つたばかりであつた。その若僧は鳳譚といふ俊秀であつた。鳳譚は熱心に大知識の講義を聽いて居たが、大知識は

「お前一人だけでは、少つとも張り合ひがないから、時機の來るまで、この講義を延期しよう」

と云ひ出した。そこで鳳譚は非常に驚いて、

「講義の延期だけは御免を蒙ります。どうか此の講義を續けて下さい。若し聽衆が足らんと仰せらるゝならば、明日は澤山の聽衆を伴れて參りますから、講義の中止だけは是非思ひ止まつて戴き度う御座ります」

と手を合して拜むやうにして願つた。大知識は

「夫れでは明日は聽衆を伴れて參れ」

と言つて、その日は夫れで別れた。

翌日となつて、大知識は今日は聽衆が大分集まつて居るだらうと思ひ、大得意になつて、講座に出て來て見ると、矢張り聽衆は鳳譚一人だけであつた。

「外の聽衆は如何致した」

大知識は先づかう尋ねた。

「はい、これ此の通り、こゝに澤山並んで居ります」

見ると鳳譚の周圍には、並べるも並べたり、伏見人形が一杯列を作つて並べてある。これを見た大知識は眞赤になつて怒つた。

「人を愚弄するかッ」

と叱つた。すると、鳳譚は嚴然として威容を正し、沈痛な聲を以て徐に言つた。

「此間こゝに集まつた數千の聽衆は、この伏見人形も同然、耳あつても講義が聞えず、頭あつても少しも働かない人々であると思ひます。先生はその人形同然の聽衆が居なくなつたのを、張合ひがないと申されましたから、頭數さへ揃うて居たらそれで結構であらうと存じまして、かくは頭數を揃へたのであります。私は如何なることがありませうとも、この講義は必ず最後まで續けて戴かねばなりません、私は講義の終る迄は必ず參ります」

鳳譚の眼はきら〳〵と輝いた。

大知識はこの鳳譚の言を聽いて、非常に感服し、鳳譚一人の爲に喜んで件の講義を說き了つた。

性を見る眼

今の世、この伏見人形の如き聽衆ばかり多くあつて、一人の鳳譚がないといふ有樣である。耳あつて聽く能はず、眼あつて見る能はず、埒の如き憐むべき人間が眼に餘る程あるのである。

浪花節や淨瑠璃を聽く耳は持つて居る。しかし道を聽く耳は持つて居ない。活動寫眞や都踊を見る眼は持て居る。しかし、性を見る眼は持つて居ない。實に憐むべきものである。

或者は、聽衆をして傾聽せしむるに足るだけの說敎者なきを言ふ。果して說敎者がないのであらうか。若し伏見人形同然の聽衆ばかりであつたとするならば、百の說敎者ありとするも、竟に道は傳ふべからずである。

この心の耳を開け

余は今の世の說敎者を信じて疑はぬ。世人が憂ふる如く學者に乏しくはない。たゞそれ伏見人形が多いのである。耳あつて聞えず、眼あつて見えざる徒が多いのである。マホメットは『石は物を言はぬ。然し我は石が物言ふを聽く。狂人は無茶なことを言ふ。然しわれは狂人より天來の聲を聞く』と云つて居る。聽く耳さへあるならば、說敎者は必ずしも高德たるを要しない。又大知識たるを要しない。

道を聽くに必ずしも得道大悟の人より聽かなくてもいゝ、佛を見るに必ずしも寺院に行かなくてもいゝ、說敎を聽くに必ずしも豫備知識を要するのではない、たゞそれこの心の耳を開け、この心眼を開け。マホメットは天より經典を與へられた時、その經典を披げて見たけれども、彼れは一字一句それを讀むことが出來なかつた。そこで「我れ之を讀むこと能はず」と言つて天に返さんとした。すると天は「汝の心眼を以て見よ」と言つた。マホメットは大努力の結果、遂に心眼を開いた。彼れその心眼を開くや、天地の大秘密までも讀破し去つた。鳳譚の努力と熱心とは正にこゝに到らんとする努力であつて、人は始めて道に到達することが出來るものである。伏見人形の如き聽衆は、遂に世の劣敗者として迷界に墮するであらう。

心眼を開きて天地一切のものを見ることは、盲目者でも、不具者でも出來る。此處に到るには聖道を聽き、信仰の念を固め己れの靈智を磨くならば何人でも知覺者となることが出來る。而して知覺者となるときは一切心眼に映じて明かに見ることが出來るのである。

第九十三章　正情

一、信仰して靈驗に感じ、正情を持續せよ

△靈的感覺　△肉體上の不具者　△靈感覺起　△盲目的機械的　△主觀からの類推　△慈悲の塊

信仰とは信神、神に對する信仰、詳しく言へば神の存在と其力とを信ずることである。

先づ神の存在から始めねばならぬ。神ありと云ふ者あり、なしといふ者もある。併し第三者の公平なる批評眼から見れば、何れにしても獨斷であつて、證明の出來る主張ではない。神の存在を實驗した、又はしたと考へて居る者に取つてはそれは疑ふべからず、爭ふべからざる事實である。色や音の存在の事實と同樣に、若くはそれ以上に確實である。只一つは靈的感覺、靈感上のものであり、他は肉的感覺、肉感上のものであるといふ差あるに過ぎない。けれども、否、それ故に、有神論者は無神論者に此の事實を證明してそれを合點させることはできない。丁度、生れながらの盲聾者に對しての色や音の說明と同樣である。若し、色、音の實在を否定して、それは汝等の迷妄だと主張する盲聾者があるならば、それに對して我々は直接に其反對の事實を悟得させることは出來ない。只間接に、揣摩の材料を給するを得るに止まる。無神論者が神を迷妄と主張する場合、兩側に於ける困難も之れと同樣のものである、只、問題が一つは有形物、從つて肉感に關したものであり、他は無形物、從つて靈感に關したものであるだけに、何れの側にも一層の困難がある。殊に有神論者から云ふと、肉感上の不具者は其數比較的に極めて少く、殆んど例外と見得るに反し、靈感上の不具者は或は先天的に、或は後天的原因の爲めに、極めて多く、爲めに、寧ろ其方が正當で、有靈識者が例外又は病者とも見える虞がある。併し眞理の問題は多數決では片付られない。而かも一時的又は表面的多數は愈々當てにはならぬ。目明千人盲目千人

靈的感覺

肉體上の不具者

と云はんよりは、寧ろ、眼明一人盲目九百九十九人といふべき常の世の中である。

マムモス洞の動物でも、視覺の少くとも可能性は持つて居つたのである。只、使用に從つて練磨發達の機會を與へられなかつた爲にその能力が衰へ衰へて遂に滅亡したのである。人間は、人間としては他の動物と區別さるべき特權として必ず靈感、少くとも其可能性はあるに相違ないのであるけれども、只使用せず、練磨せず、否却つて、反對に之を消滅させる原因、境遇（多くは時代思潮、例へば唯物論の如き）の多い爲に殆んど湮滅するのである。

然れども、衰微、或は殆んど湮滅の狀態にあるとしても、もと〳〵から全くなかつたのではないから或る特別の場合には、かの靈感が覺起せられて閃光を發することもある。而しその場合にはそれが神の實驗と呼ばるゝことがある。所謂『苦しい時の神頼み』や又はルーテルが一所に步いて居る友達が雷に擊たれて死んだのに自分が安全であつた場合の心狀態は、恐らく此場合に數へてよからう。

靈感覺起

然るに、實は、靈感が鋭敏である限り、否全く鈍麻して居ない限り、神を經驗する機緣は、決して非常の特別の場合のみでなく、いつも眼前に無數にある。諸行無常や、罪惡深重の經驗が屢〻神に導くものであることは云ふまでもなく、宇宙の凡ての現象は絕間なく神を現はして居るのである。かの特別に靈感の鋭敏な人、即ち宗敎的天才のみが、全く獨創的、全く自發的に之を

獨創的自發的

捉へる事が出來る。而して普通の多くの人は彼等の指導によつて、自分の内の眠れる靈感を醒ま
し、強うし、後には自分も獨立に之を實驗することができるやうになる。

林檎は、いつの年でも、何處の地でも落ちるものであつても、只ニウトンの天才のみがそこに
引力を發見することができた。而して多數の人は學校の先生から敎へて貰ふ。若し敎へて貰はな
かつたら恐らく終生、引力の觀念も有ち得ないであらう。

右の如く論じて見た所で、それは決して神の存在の證明ではない。只神の存在の信仰の可能、
又は暗示に過ぎない、

併し、客觀的に理論的に之を論ずるとせば、我々は神の存在は萬有の根柢として、必然のポス
チュレート(要想)であり、且つ其信仰は、その意識的なると否とに論なく、我等日常生活の必須
の根本條件である。

今假りに科學の宇宙觀を眞理と見るとする。科學では、宇宙の現象は物質分子の一定の法則に
從つての離合集散に外ならぬとしてゐるが、併し何故にその一定の法則に從つて他の法則に從は
ぬか、又は何故にかく離合集散する物質分子が終局的のものであるか、抑も又何故に法則が不變
なるか、換言すれば、何故に自然は劃一なのかの理由は分らない。只事實さうあると云ふ迄であ
るが、今一歩、つき入つて、只さうある所以の根據如何を尋ぬれば、我等は之を神の意志と見る

盲目的機械的

主觀からの類推

の外はないと思ふ、或は偶然というか、それは只言葉の差のみである。併し其場合その偶然は盲
目的機械的のものであつてはならぬ。此語は寧ろ避くべきである。若し盲目的の偶然を許すなら
ばそこには突發がある、不秩序がある、此惡しき意味の偶然でない、偶然は多くの場合神を意味
して居る。『天佑』を惡しき意味の『偶然』と同義語と見るのは語の濫用である。孔孟の所謂『天』も
決して偶然ではない。

我々は又次の瞬間に死ぬかも知れない、否我のみでなく、此全世界が亡びるかも知れない。今
自分を藏うて居る家根が落ちて大怪我をするかも知れない、併しさう考へて日常生活をして居る
のでない。又さう考へて居たら生きて行く事も出來なからう。只人々は何かなしに、宇宙の秩序
に信賴して生活して居るのである。從つて暗々裡に宇宙の秩序の擔保者の存在を假定して居るの
である。

神とは萬有を支配し、而かも萬有に現はれ又而かも萬有を超越した大心靈である。それは丁度
我々の肉體は、そこに宿つて居る心靈に支配され且一々の肉體の動作に、同時に心靈の作用が現
はれ、而かも我々の心靈は肉體を超越して居る。少くも超越し得る、又は超越すべきであるが如
くである。勿論、神の寫象は之を寫象する者の心意發展の段階に從つて區々たらざるを得ない。
我々の一切の智識は主觀からの類推の外になく根本的に主觀に依屬して居るからである。科學上

の物質の概念にしてもデモクリットの昔から今日の電子まで、その間の差違の如何に大なるかを想像すれば思半に過ぎるであらう。併し一々の定相如何に變化し得るにしても物質其物の存在は動かされぬと同樣に神もその寫象は彼此多大の異同あるにしてもその存在に影響はない。

神は統一と自由と自覺とある精神的存在といふ意味での最大無極の人格である。此至高絶大の人格と我々個々の小人格との關係如何、固より、此關係は他に比類のないものであるから、只その最も近似した關係で言ひ表はすの外はない。此事情の下に我々は神を親と見るのが最も適切である。即ち其關係は至愛の關係である、實際古今の宗教的天才は、何れもかやうに教へて居る。或は天の父と云ひ愛そのものと云ひ、慈悲の親と云ひ、慈悲の塊と云ふ、凡ての比喩ではあるが比喩でなければ言ひ表はせないのである。

慈悲の塊

母の愛は强烈であつても、時としては盲目的の愛になり易い。父の愛は正義を含んだ寛嚴並に存する愛である。罰すべきは用捨なく罰する愛である。但しその罰は愛から來るもので憎みからではなく、實に有難い罰である。

神と人との關係は父子の間柄である。從つてそこには互の交通、即ち靈交靈通が可能である。併し必要條件は心の淸きこと即ち正情を持續すること、至誠であらねばならぬ。是は肉體上の骨肉の關係からの類推である。類推以外、人の知識の源はないから止むを得ない譯である。

之を要するに、宇宙は之を外的に物質的に、即ち肉眼から見れば、無限の空間、無限の時間に於ける物質分子の、一定の法則、一定の因果關係に從へる離合集散に外ならぬのであるけれども、之を內的に精神的に、即ち靈眼から見れば、同時に一個の大神靈の下に於ける無數の小神靈の自由なる生活發展であつて、各物質分子が不滅である如く各神靈も不滅にして、無限の向上をなしつゝあるのである。（勿論、自由があるだけに向下墮落の可能もある）實に愉快極まる次第である。人生一切の悲劇喜劇は皆それ〴〵意味があり、畢竟各心靈向上の材料乃至刺戟を提供して居るのである。

無限の空間

それで神を信ずるものに取つては、宇宙人生の如露如電の空なものでない。或者の謂ふ如き、三界は決して火宅ではない、人生は決して苦海でない。否火宅苦海に何れも我々を向上させる爲の舞臺である。悲觀する必要はない。我等は之に對して或種の人々のなすが如く、それを避けよう逃げようとしてはならぬ。之に打克たなくてはならぬ。逃げたのでは向上しない、之を突貫し之を征服することに於て悅びを見出さなければならぬ。否、確かに悅びが見出される。神を信ずる者には、終局の勝利を疑ふことができぬからである。

人生は苦海でない

信仰の力は無限である。靈驗の多少は即ち其信仰の力の多少に比例すると云つてよい。一度靈驗を自覺して來れば、信仰は自ら向上する、信仰の向上に伴うて益靈驗の大を感ずるは、恰

も學問して力を得、其力に依りて愈〳〵學問が進むと同一である道人は常に正情を持續して、神の神聖なる靈驗に活きなくてはならぬ。

第九十四章　奉禰

一、行住坐臥奉禰大神靈と唱へよ

△花と共に笑ひ　△外道の人　△奉禰大神靈　△湧泉を見出し　△神を知るの道

我等若し一身を神に捧げ、只命是に從はゞ、行くとして道ならざるはなく、做すとして義ならざるはないのである。而して、君には忠、親には孝、兄弟には友にして、朋友相信じ相助け、世兼に仁愛を施し、僞らず飾らず、憎まず譏らず、盜まず欺かず、奢らず誇らず、驕らず謙遜にして、夫婦相和し、春來れば花と共に笑ひ、秋來れば山と與に錦を織り、山を愛し水を樂むに於ては懷疑もなく煩悶もない。其然る所以のものは何であるか、卽ち天を拜し地に事へ、只命之れ從ふ清淨なる精神を以て神に信賴するの德である

花と共に笑ひ

然るに世人の多くは、只名利に沒頭し、目前の小利に迷ひて大義を忘却し、一度逆境の人となるときは、氣忽ち餒るて安んずる所を知らず、或は人を欺き、或は世を害し、遂に自ら殺すもの世間頻々として跡を斷たない、洵に憐むべき限りではないか。然れども、神は我等を偏愛し給はず、大臣たり、大將たり、富者たり、貧者たるを問はず、我等は只我が置かれたる地位に最善を盡すならば、安立は自ら其中に在つて、恒に感激快活の生涯を送る事を得るのであらう。

外道の人

天國と極樂とは、神に事ふるものゝ心に存し、惡魔と地獄とは私心を逞うせる者の胸に宿す事を知らねばならぬ。天に行くも地に落つるも、偏に信神の有無の如何に依つて決するものである。外道の人は幸福を外に求めて自ら苦しみ、溺を悞れて却て水に杓たるの愚を爲すのである。

奉禰大神靈

道人は此の理を辨へ、行住坐臥「奉禰大神靈」と唱へ、心を淸淨にし、神に感謝し、神に祈禱し、神を禮拜し、胸中の懷疑と混迷とを打拂ひ、無限の妙味を感得し、時處位に安立するの快を學ばねばならぬ。

奉禰大神靈と稱ふれば、亂れたる心は平靜に歸し、憂鬱無明の精神は開けて、光彩燦然たる光明に接することが可能である。薄幸悲運も轉廻して心の奥底より、幸福を感謝し、宇宙の恩惠の至大なるを獨り喜ぶに至るのである。

人は先づ神を知らねばならぬ。神を見なくてはならぬ。如何にカントやニーチエの如く說くも自家一點自得の實處なくば、何の驗もないのである。正坐默想の前に奉禰大神靈を幾回となく稱

へ精神の統一をなし、宇宙を内觀自得するに努力せば、何れの日か大覺に入るの秋來るべきである。そこに永劫盡くることなき清泉を見出し、以て生命を永遠に保つべき水を汲み、そこに永劫暮るゝことなき日輪あるを知り、以て神の靈光を仰ぐ事が出來、更に一度心眼を開きて宇宙の萬有を靜觀すれば、そこに秩序あり、統一あり、而かも脈々として躍動せる、眞の生命の根源を明かに證悟し得るのである。神と云ひ、天と云ひ、佛と云ふ、名は實の賓である。唯我等の心内心外を通じて、一如の大神靈あるを知り、之を信じて樂しみ、樂しみて生甲斐のある人生を送るは如何にも快事の大なるものではないか。此の信こそ人々の修養をして、眞に其人の所有となり、眞實の力となり、其人の人格を創る根柢となるのである。

清泉を見出し

眞實の力

げに神を求め、之を知り、之を信じ、之に事ふるは人として、最上無二の幸福であり、且恩惠ではないか。

孔子も、生を知らずば死を知らじと曰つた。生を知らば死も亦知る事が出來よう。生を知るは人の人たる所以を知るの道理で、人の本を知るのである。神を知るときは、人鬼、幽明、死生、眼前に明白となる、人の生れて人たる所以を知らざるが故に、人鬼、幽明を二とするのである　故に眼に見る所のみを知つて、見ざる所を疑ふ故に悟りの學がある。聖道には一事の疑はあれども、一生の疑ひはない。外道は一事の疑を知らず、知らざるが故に一生

神を知るの道

幽明輪廻の迷ひあり、是れ終身の疑である。富貴貧賤は一切神の攝理である。道に外れたる富貴は、恰も浮雲に等しく、何等の價値もないのである。貧賤も道を知るものは愉快にして、滿足と感謝の念が自然に湧出し來るのである。

富貴の道は禮を好み、德を施し、他人を愛し、慈悲を行はねばならぬ。貧賤の道は外をねがはずして能く勤め能く守り、能く勵まねばならぬ。此に於て人の人たる全きを得ること、出來ないであらう。

奉禰大神靈
奉禰大神靈
奉禰大神靈
奉禰大神靈
宇宙萬象皆歸聖道
宇宙萬象皆歸聖道
宇宙萬象皆歸聖道
宇宙萬象皆歸聖道

奉は天にして、禰は地である。奉禰大神靈と唱へ奉るは、恰も天地大神靈と尊唱し奉るも、

同じ意味であつて、卽ち森羅萬象悉く一切のものを生み出す法藏である。目に見ゆるもの、目に見えぬもの、親子兄弟夫婦を始め宇宙間總てのものは皆是れ法藏から出て來るのである。

斯るが故に、飯を喰ふのも奉禰大神靈、腹痛も奉禰大神靈、金儲けも奉禰大神靈、損失も奉禰大神靈、痛いも痒いも奉禰大神靈、樂しきも奉禰大神靈、苦しきも奉禰大神靈、嬉しきも奉禰大神靈悲しきも奉禰大神靈、一切合切奉禰大神靈。

神靈敎の標語は宇宙萬象皆歸聖道である。天は聖なり、地は道なり、心は聖なり、骸は道なりで、聖一つの働きに依つて、道は形に顯るゝもので、麥となり米となり山吹となり櫻となるのである。

天地の四時行はれ、百物成るの姿をば、奉禰大神靈といふ。聖より出でゝ道に入り、道を行うては聖に入る、是則聖道の轉ずる所、宇宙萬象皆歸聖道である。嗚呼、奉禰大神靈、宇宙萬象皆歸聖道。

第九十五章　大覺

一、大覺すれば火に燒けず、水に溺れず、死生を超越するものと知れ

△靈を以て神を視よ　△眞心の麻痺に基く　△天眼通　△天耳通　△他心通
△神足通

聖道を大覺すると云ふ事は、神を見るの法を知ることである。幾等良い耳を持つて居ても、耳で色を見ることは出來ぬ。何程良い目を持つて居ても、目で音を聞くことは出來ぬ。其如く神を見たり、神を聞いたりするには、又た別の機關に依らねばならぬ。別の機關とは何であるか、卽ち吾人の中にある靈が夫れである。耳を以てすれば音が聞える如く、目を以てすれば物の色が見えるごとく、此の我が中にある靈を以てすれば、必ず神の御聲を聞き、必ず神の御姿を見ることが出來る。之は私の實見するところであり、且又古より聖人や眞人の說いて居るところであつて、凡て宗敎的經驗者の齊しく證言するところである。佛敎では之を月と水とに譬へる。卽ち幾等月が照つて居ても水が濁つて居ては、其月は寫らぬ。丁度其如く、安念や雜念や邪念が我が心を亂して居ては、迚も眞如を悟ることが出來ぬと說く。基督敎では、『心の淸きものは幸なり其者は神を見ることを得べければなり』と敎へる。卽ち心の淸き者でないと、神の御姿を見ることが出來ぬとの事である。又た神道は『神は諸の不淨を受けぬ』とある。而して皆同じ事を云ふのである。左れば『サア神があるなら見せて呉れ、神があるなら聞かせて呉れ』と云つて、肉體の

靈を以て神を見よ

良心の麻痺に基く

汚れた耳や目を持つて來たところが駄目である、先づ汝の心を清くして來れ、先づ汝の靈耳靈目を開き來れ、左れば必ず神の御聲を聞き、必ず神の御姿を見ることが出來る。

去れば如何にして其心を清くし、其靈耳靈目を開く事が出來るかと云へば、先づ本氣になる事である。眞面目になることである。『目に見えぬ神の心に通ふこそ、人の心の誠なりけれ』と明治天皇の御製にあるは、正しく此處の事である。

若し茲に私は罪を犯したことがない、詐僞を申したこともない、自ら省みて疚しい事は少しもない、生れて今日迄爲すべきことは之を爲し、爲すべからざることは一切爲したる覺ないと云ふものあらば、其れは虛言家か狂者で、既に良心の麻痺したもので、決して本氣の沙汰とは思はれぬ。孔子ですら義を聞いて移る能はず、不善改むる能はず、之れ我が患なりと云ひ、偉人保羅も亦た、自ら省みて己が不潔の心に恥ぢ『此の死の軀より我を放さんものは誰ぞや』と叫んだ。古歌にも『なきなぞと人には云ふてすみぬべし、心の問はゞなんと答へん』とある。全く自ら眞面目になつて考へて見よ、己は思うた程清きものでない正直なものでない、德の高いものでない、義の强いものでない。一言にして云へば、人に對し己に對し一點の疚し處のない人は、世界に一人もないと云つてもよろしい。左れば一つ本氣になつて、眞面目になつて、謙遜になつて、己の心の中や、身の行を反省して、疚しい心を取り去つて、聖道の知覺者となり、神の姿を見、神の御聲を自由に聞くやうになり、至誠以て靈眼を開くに至れば、水に溺れず火に燒けず、天眼通力、天耳通力、他心通力、神足通力等を稟くることも又自由自在である。靈驗の如何に尊きかを知り勵精一番此の堂奥に達すべきである。七妄五欲を去つて、一心に修行を怠らざれば、何人も茲に至ることが出來る。學問の淺深や、才智慧の多少に依るものではない。

天眼通
他心通
天耳通
神足通

七妄
怒哀樂
愛
欲
卽喜

進化論

第九十六章　生死

一、生も死も人の力にあらず、悉く神慮なりと知れ

△進化論　△猩々の牝　△猿と犬　△人工交配　△悉く神の御心

總ての生物は悉く神によつて創造られたものであるが、從來の宗教家は、馬は永遠の昔より永遠の未來迄馬、牛は百萬年前も百萬年後も牛で、生物には絕對に變化なきものと考へられたのと、人は現在に於て惡事を重ねたものは來世に於て牛や馬に生れ變つて來るものと考へられて居た。然るにダーキンの進化論によつて、生物は下等なるものから順次段階を追うて、高等なるものに進化し來ることが明かになり、更に近來に至つてメンデル說が出でゝ生物は自然に變化す

ると同時に、急激なる變化によつて新生物が現はれることが判つた。（茲に云ふ自然の力は卽ち神の力である）故に未存の新生物が常に生じつゝあるのである。神が個々別々の生物を造つたと同時に、又變化の力をも顯しつゝあるのである。

猩々の牝

例へば馬と驢馬との間には騾馬が出來る。その牝には生產力がないけれども、多くの牝には仔を生む力がある。獅子と虎との仔は、今歐洲で盛んに繁殖されて居るが、これも牝の方にも生產力があるらしい。又印度では猩々の牝が、莘尾期になると山中から人里に出て來て、人間の男子を攫つて行くことがある。そして自分が滿足を得るまでは、木の實や其他の食物を與へて之を養ひ、欲望を達した後には、再び之を里に連れ返すとのことである。かくして生れた子供のことは未だ十分に研究されて居らないが、所謂山男がそれらしいとのことである。山男の人間に接しないものは、言葉の如きも猿と同じく單音を發するに過ぎぬ。

狼と犬

未だ十分に確められた譯ではないが、似寄つた高等動物の間には、大抵雜種が出來るといふことになつて居る。狼と犬、及び狐と犬との間には必ず雜種が出來るし、或學者に從へば、熊と狐との雜種も出來るとされて居る。而して下等動物、就中『プランクトン』（浮游動物）の間には、絕えず雜種が出來つゝある。それは雲丹海月等の浮游動物の精液が、常に海上に浮んで居るので之によつて受精する下等動物が少くないからである。かくして常に新しき生物が出來つゝある。

人工交配

人工交配は植物に於ける如く同樣に動物に於ても或る度迄神の力の一部を助ける事が出來るらしくなつて來た。高等動物中牛馬の如きものにも、盛んに人工交配を行つて優良なる種類を作りつゝある。かくの如き有樣なれば、人間が自然の生物に干涉することに由つて、種々樣々の生物が出來るやうになることは想像に難くはないが、夫れは末の末の一部を人が手傳ふに過ぎない、根本に於ては、人の力を以て鼠一疋雀一羽造り出すことは、永久に不可能である。形體は出來るにしても、其の魂を入れることは能はぬ。魂を入れることが出來ぬやうに、魂を取り留めることも出來ない、生物一切の生死は人の力で左右する譯に行かぬ。悉く神の御心の儘であるのである。去れば明けても暮れても、神の力の偉大にして絕對に無限なるを信じ、其力に縋り賴寄り特別に厚き恩寵を受けねばならぬ事は管々しく語るまでもない。

御心

墨く神の

第九十七章　因果

一、因果應報は、覿面なりと悟道せよ

△心の裡に苦痛を感ず　△身を神に獻じ　△私慾化せられ　△自己の傲慢心　△迷妄の地獄　△地獄極樂

因果應報と云ふ言葉は、佛教でも盛んに用ひた語であるが、原因は結果を生む。善因には善果を得、惡因には惡果を見るのは、神の眞理である、是の應報の確實なる事を明に示すのが宗教である。

天地神靈の賞罰には三の種類がある。

一、自然法に由るもの
二、心理法に由るもの
三、神の直轄に由るもの

自然法に由ると云ふのは、例へば火に手を入れば熱い、是れ罰である。春日に背を温むれば心持が好い、之れ賞である、而して此の自然法に由る賞罰は善人と惡人を區別しない、心理法に由ると云ふものは、例へば惡事を思うたり行うたりすると、何となく面白くない、何だか氣が尤める、何處か心の裡に苦痛を感ずる、是れ罰である、之に反して何か善き事を考へたり、行うたりすると、自然と心が浮き立つやうな、誇りたいやうな、勇ましいやうな氣になる、之れ賞である。尤も此の心理法に由るものは、自然法のやうな單純なものではなく、隨分複雜して居る。即ち最初惡を働く時には、誰でも其心に怖いとか、恥しいとか、相濟まぬとか云ふやうな感を起すものであるが、段々と其惡事を重ぬるに從うて、次第々々に其感が薄くなり、終には其れが却て

心の裡に苦痛を感ず

面白くなり、愉快になり、得意がるやうになり、一寸其賞罰に明確を缺くことになる。然し夫れは病が膏肓に入つた故であつて、之を以て賞罰が顚倒したと見ることは出來ぬ。何となれば其患者は早曉之れが爲に斃るゝに定て居るからである。

第三者に屬する神の直轄的賞罰とは何んなものであるか。我一身の上より、他人の上に就て稽へて見るに、此の神の直轄の賞罰と思はるゝものを發見することが尠くない。例へば自分（信堂）は十四歳の時翻然道を悟て、我身を神に獻じて以來如何なる境遇に處しても、如何なる事情に迫られても、決して己のが名利の爲は動くまいぞ、最早死んだものと諦めて、一生涯只々神の御用を務むべきぞと、我と我心に誓つたのであつた。然し其後色々と生活の波に漂うたり、人心反覆の間に我身を處して行く間には、時々思ひ復して、單に神に任せて、野の百合や、空の鳥に比して居たばかりでは不可ぬ、少しは勞めねばならぬ、紡がねばならぬ、即ち己のが衣食の途をも考へねばならぬ。又神の御用をも勤むるといふものゝ、名もなく、力もなく、資財もなければ、其所謂る神の御用をも十分勤むることが出來ない譯であるから、少しは名利の獲得にも、思慮を費さねばなるまいと考へ、扨こそ我智我謀を働かせた事もあつた、而して之を決して惡い事とは思はなかつた、最初の程は矢張り神の御用を務むる一方便とも心得、敢て十四歳の時の心約を破つたとは思はなかつた。然し人間ほど弱いものはない。心一たび茲に溶け始むれば、何時しか不知

身を神に獻じ

私慾化せられ

不識の間に俗化せられ、私欲化せられ、竟に神に奉ずる心よりも、己れに奉ずる心の方が強くなつて居た、左ればにや、其時は天罰覿面に我身に加はり、念ふ事は外れ、計畫は水泡に歸した。初めて氣がついて見ると、餘程危險な處迄落ちて居たのであつた。要する所三十年の信仰生活の間に、己が名と利とを念うて成功したることは一度もなく、却て神より叱られるばかりであつたが、然し夫れと反對で、若夫れ、只々神の國と其義しきとを求めて、主一無適に進んだ時には、神の恩寵が其間に加はり、スラリ〳〵と順潮に進んだのである、而して此の實驗は實に怖ろしい程不思議であつた。之は自分一個に對する神の直轄的賞罰の實例であるが、何人も此の神秘的不思議なる賞罰を否むことは出來ないのである。

自己の傲慢心

次に他人に就て之を看るも、是亦怖ろしく且つ不思議に感ずる程の實例を持つて居る。或人は一旦神に事へて、十分に神の恩寵を受けて居たが、ツイ或者の爲に誘惑せられて神を舍たが、其後は事毎に失敗し、竟に世人より冷遇せられ死んで仕舞つた。又或者は非常な熱心家で、教會の柱石となつて居たが、然し兎角己を舍る能はず、往々神と教會とを己が名利方便に供して居たが、間もなく其家は破產し、其身は零落して死んで仕舞つた。又或者はナカ〳〵辯舌もあり、學力もありて一時盛名を世間に馳せたが、然し怎しても自己の傲慢心に克つことが出來ず、終に衆望を失つて老朽して仕舞つた。惟ふに此等は敢て神の直轄的賞罰と謂はず、單に國家の興亡や、人事成敗の理に照して論ずることが出來るから、左程不思議なることでもないが、更に之より不思議なことがある、夫れは自分の眼で、彼の人はあんな善からぬ計畫をして居る、惡い料見や狡猾い念慮を懷いて居る、必ずや今に神罰が降るぞと思うて居ると、果して其人が頓死するとか、大病になるとか、必ず何とか神罰を受くるに極まつて居る、而して、自分は幾等も此の實例を擧げることが出來るのである。否、人若し此言を疑はゞ、靈眼を開いて周圍を見よ、自然法を犯して火に燒け水に溺るゝものゝ多きが如く、心理法に由て本心に責められ、迷妄の地獄に苦しむものゝ多きが如く、此の直轄的の神罰を受けて、今更の如に號泣するものゝ多きことは、蓋し思ひ半に過ぐるものがあらう、畏れても尙惕るべきことではないか。

迷妄の地獄

於此乎、人或は謂はん、如何にも自然法や心理法の賞罰は解る、又直轄的の刑罰もあると思ふが、然らば此世の中には惡人が死ぬる迄榮耀榮華を極め、善人が死ぬるまで不幸な生涯を送ることあるは如何なる譯ぞ。成程惡人は榮えて居ても、所謂心理法で、心の中で苦しんで居り、善人は不幸で居ても、心の中で樂しんで居るから、賞罰は其間に明かなりと謂ふことも出來よう。然し惡人必しも心の中で苦しまぬ、中には惡を爲して愉快を感じて居る奴も居る、善人必ずしも心の中で樂まぬ、中には泣いて居るものもある。然れば賞罰は、終に明かならざるにあらずやと、曰く、然り、急なるあり、緩なるある如く、神の直轄的賞罰も早きあり晩きあり急なるあり緩な

るのがある。故に假令本心痺れて惡を働いて此世で榮華を極めて居ても、罰は必ず來世に待つて居る。又た假令此の世で窮地に居ても、若夫れ善を持して動かなかつた善人は、必ず來世に至りて其報いを受くるに相違ない。斯く云はゞ人又謂はん、今や新宗敎を以て任ずる神靈敎にも、尙來世の存在を說くかと、然り、大に然り、若夫れ人に來世なからんか、人生間に存する道德律は、其根柢をも其終結をも失ふものとならねばならぬ。假令從來の宗敎の敎理や、神學や、佛敎の云ふ地獄極樂の說を棄廢し一笑に附し去るとしても、然かも此の永生と復活の眞理は、最早今日宗敎上よりも科學上よりも主張せねばならぬと信ぜねばならぬのである。此の永生の信仰なくんば、此世の人も、皆竟に未製品たるを免れぬ、而して人生の努力も希望も、終に空虛に歸せざるを得ないのである。自分は好んで人の前に躓く石を置かうや、是れ人生問題を解くべき唯一の鍵である。

地獄極樂

此に演べた神の直轄的賞罰と、永生の理由が能く明瞭に解し難い人は、其人の靈眼が、未だ朦朧として明かでない爲めである、暫く忍耐して神靈敎を研究せば、正に判然此怖るべき不思議の眞理が解得され、他日案を拍て然り然りと答る時が來るであらう、決して此神秘的事實を無視してはならぬ。其處で因果應報は覿面なれば、悟道せよ、道を悟れ、眞理を大覺せよと叫ぶ所以である。

第九十八章　報恩

一、恩を受けたるものは、之に報ゆるの道を辨へよ

△神の恩　△我等の宗家の恩　△親の恩　△師の恩　△個人の恩　△社會の恩

神の恩、天皇の恩、父母の恩、師の恩、個人の恩、社會の恩、以上を稱して六恩と云ふ。

人は天地大神靈の惠みに依り、生を享けて此世に顯はれ、洪大無邊にして、計量しがたい恩寵に浴しつゝあるにあれば、寸間と雖も神の御恩を忘れてはならぬ。神の御恩を受けつゝ、神の御恩に感じないものは、自然に神の恩寵薄らぎ、神の惠より遠ざかり、遂には後悔して泣かねばならぬ時節が到來するのである。

神の恩

天皇は、天照大御神の神勅を奉じ給ひ、我國土を治し召し、常に慈悲を施し、德を垂れ國民安堵の爲に身を犧牲とし給ひ、吾等の大先祖より今日迄、吾等の宗家となつて、國土を掌握統御し給ふ、此御德の大なるは、今更云ふ迄もなきことにして、其麗しき恩惠の裡に在つて、日夜平穩に、無事に家業に携はるを得ることの、難有き御恩を知らねばならぬ。

吾等の宗家

父母は茲に吾等を生み、炎暑にも倦まず、寒夜にも眠らずして哺育し、稍長ずるに及びては、學藝技術を敎へ、只管善良にして、人の龜鑑ともなれかしと祈りいたはり訓へ導き今日に到らしめ給ひし、此御恩は、一樣尋常の苦勞や、難難ではない、中納言兼輔の歌に『人の親の心はやみにあらねども、子を思ふ道に迷ひぬるかな』。人の親の心とて、元より闇ではない。是非善惡の辨別は勿論つく。然しそれが、我が子の身の上に關することゝなると、心の鏡は恩愛の霞に曇つて、一向に辨別が出來なくなる程、子を思ひ、子を愛し、無限の愛に暖められて生育を見たのである。之を思へば親を粗末にすることは出來ぬ。

親の恩

親の存命中は、格別不孝をしたとも思はぬが、さて親に別れて見ると、今頃親が死ぬなら、彼れは彼あするのでなかつた。是は斯うするのであつたと、怨みの數々綿々として盡きない。不孝をしつゝ親に別れた悔恨の情は、親に別れた人の子の、誰しも等し經驗する所であらう。されば親の存命中は、勿論親と死別した後も、親を慰め、親に事へ、親の大恩に報いるの精神が、人として大事のことである。古人は孝は百行の基と云つた。此緘言は眞理である、幾萬年經過しても、變ることなき敎訓である。

師の恩

師匠なくして、世の中を知ることは出來ぬ。師は神の力に依り先人が發見したところのものを、受繼ぎ又は己が發明したところを、後人の爲に敎へ訓して向上進化を助けるのである。學びの上に師程尊いものはない。師の恩を感じない人は、如何に學問に優秀であり、技術に熟達したりとするも、其人格は論ずるの價値がないのである。

個人の恩

又個人の恩を、恩と知らねばならぬ。個人の恩とは、個人より個人に受くる恩のことで、此恩を受けずして、生存することは出來ぬ。如何なる人も大小となく、恩人を持て居る、夫れを恩人と知るか、氣付かざるかにある。恩人とは位の高き人や、地位名望のある人のみでない。案外地位も富も低き人に恩人があるかも知れぬ。この個人の恩は、其個人へ報ゆるの道を悟らねばならぬ。

社會の恩

社會の恩とは、社會共同の恩である。親があるのも兄弟が生存するも、自己が在るのも、皆等しく社會共同の恩である。左れば又社會の恩に報ゆるの道を常に考へねばならぬ。

恩を享けて恩に感じない、然して恩に報いないものは、蟲魚も同じである。獸類でも高等動物たる、牛や馬、犬や猫、猿や狐などは、必ず恩に報ゆるの道を知つて居る。況んや人にして恩を知らざるは、正に動物にも劣つて居るではないか。

恩を知るは大義の本で、善業を開くの門戸である。恩に感ずるものは、人に愛敬せられ、名譽は高まり、地位は上り、自然に向上の道を辿り、神の坐に近づくの捷徑である。斯るが故に些細の事柄にも、恩は恩と感じ、夫れ相當の報恩を致さねばならぬ。如何に信心の念慮厚くして、他

の行動正確なりと雖も、報恩の道を知らぬものは、大なる基礎を作り、堅固なる土臺の上に清淨なる出世を望むことが出來ぬのみか、神の靈驗も顯著ではない、ましてや知覺、大覺に入ることは勿論覺束ない。

恩を知るものは生死の境に在りと雖も、善根を壞ることなく、恩を知らざるものは、善根を斷滅するものである。是が故に神は恩を知て德に報ゆるものを賞し、之に反するものを罰し給ふのである。

然るに世人往々恩に報ゆるに、德を以てするを知らざるのみか、恩に報ゆるに仇を以てするの輩がある。自分の世話になつた家の秘密を、他人にドシ〳〵口外して、恥とも罪とも思はぬ人を見ることがある。何と卑い下劣な精神ではないか。自分等を敎へ導く所の敎師を被告人視して、同盟退校を企てたり、辭職勸告をも實行するのは何たる事であらうか。師に對して恩を感ぜぬやうであれば、必ず親に對して不孝を重ね、皇室に對し忠義を知らず、況んや國の恩、世人の恩、其他の恩なぞは、更に辨へる事のない沒分漢であると云つても、辯解の餘地はないであらう。

例令己れ德足らずして、恩に報ゆるの道を實行することが出來ぬまでも、恩を仇で報いてはならぬ。幷は他人の爲でなくして、皆自己の爲めである事を知覺するがよい。

第九十九章　布施

一、報を受けんとして施す勿れ、施すと同時に施したるを忘れよ

△澤井知明　△智眞和尙　△後生大事　△己の本分が盡し　△貧民窟　△五合袋
△い、氣持　△藝術を貴び

澤井知明

慈善的の施しは、善事である。然し施しをなすに報いを得んとするは誤りである。眞の慈善は、慈善行爲をなすと共に、其なしたる事を忘れるのでなくてはならぬ。玆に澤井知明の大福帳と云ふ、面白い話しがあるから述べて見よう。

京都の人で、大黑屋澤井傳兵衞と云ふ人は、珍らしい人物であつた。彼れは熱心なる佛敎信者で、知明と云ふ法名で通つて居たが、普通の佛敎信者とはその質が違つて居た。彼れは一個の徹底せる道人であつて、その信仰は所謂天地を貫通して、宇宙に歸着した底の概があつた。而して、洒脫の氣風があつて、その日常の言語行動には忽諸に附し難い、ある尊い風韻が伴つて居た。のみならず彼れはよく人間の天職と云ふものを自覺して居た。而して、其天職の如何に貴く、自己

知眞和尙

一身なるものゝ如何に大切であるかを知つて居た。職業の神聖も、身分の神聖も、すべて此自覺から悟り得て居た。

或る時、歌の中山の淸閑寺の智眞和尙が傳兵衞の宅にやつて來た。その時傳兵衞は丁度帳場に坐つて大福帳を披げて、しきりに算盤を彈いて居た。智眞和尙は之を見て、「まア傳兵衞何をやつ居るか、お前は佛法に熱心ぢやと云ふが、何だ算盤勘定なんかやつて居るとは。餘り信者らしくもないネ」「これは和尙樣も餘つ程どうかして居なさる。どうしてどうしてこれが私にとつて大切な佛法で此大福帳は私の大般若經、此の算盤は私の珠數で御座る」、「ハハア面白い事を云ふなア、夫れぢやあ其大般若經を讀んで居ると何か御利益があるかな」

後生大事

「ありますとも〳〵、大ありで御座ります。私は子供の時分から、後生大事に、此大般若經を一生懸命に勵んで來た御蔭で、妻子も養へれば、多少の慈善喜捨も叶ひ、家內安全と云つた有樣で、私の今日あるは全く此御經の賜物であります」

「うむさうか、それでお前は、それを熱心に信仰してゐるといふのぢやな」

「さうでござります、此の大般若經に依て天下國家にも立派に義務を盡し、君の御恩、同胞の御恩、親の恩、一切萬物天地の御恩にも報じ得られるのです」

「いや面白い佛法ぢや、それでは拙僧も一つ大般若經を習うて見ようか喃」

虛僞りなく

「いや〳〵およしなさい。智眞和尙は、智眞和尙に依つて、智眞和尙の大般若經をお讀みなさい。大般若經は子供の時から、最初からやらねばならぬもので、中途半頗からやつても駄目です。夫れに此の大般若經は眞面目に正直に虛僞りなく讀みもし、聽きもし、習ひもしなければならぬもので、少しも曖昧なことをやつたり、胡麻化すとか云ふ心を起すと、忽ちにして天罰が來つて身も骨も立たなくなつてしまひます。貴僧は本來の佛法をおやりなさい」

「いや是は面白說法を聽かせられた。今度來るときに何ぞお禮を持つて來よう」

「なにお禮は只今頂戴いたしたいもので」

「いや今日は何も持つて居らんが――」

「水引をかけたものばかりが御禮では御座いませぬ。あなたの胸に持つて居なさる御經を一つ佛の爲に供養して下され。どうせ僧侶は無一物、金は私等の方で融通するもの、貴僧達は心を我々に融通して下さるのが本當で御座る」

已れの本務を盡し

傳兵衞は斯う云つた調子の男であつた、彼の宗敎、彼の信仰、彼の自覺は實に活宗敎であり、活信仰であり、活自覺であり、眞の聖道履行者であつた。

彼は每夜散步に出るのが常であつた。一日業務を果して、今日も亦己の本務を盡し得たと云ふ愉快な心持になつて、更に此の肉體と精神とに廣濶の氣を養ふべく外に出るのであつた。しかし、

彼の散歩には、此外に一つの目的！尊い目的があつた。

彼は散歩に出る毎に、その頸には大きな頭陀袋を掛けて居た。その頭陀袋の中には、一升入五、合入の小さな米袋が數個宛入れられてあつた。彼は此の異樣な姿で何處に行つたかと云ふと、町外れの貧民窟に行くのであつた。

貧民窟と云へば、何處にもある通り、毎夜の樣に何處かに夫婦喧嘩があつた。而して其の喧嘩の原因はと云へば、大抵生活問題が當面の問題で、「一體明日は何を喰んだよ、男の癖に女子供も食はせることが出來ないのか」と女房が云へば、亭主は亭主で捨鉢に氣を荒立て「こん畜生愚圖々々云ふなら出て行けッ」と云つた樣な調子で遂には打つたり、蹴つたりの騒ぎとなるのが常套事であつた。

傳兵衞は能く此の間の呼吸を知つて居た。それで泣く、怒鳴る、喚く、大騒ぎをやつて居る家の軒の下にこつそり歩み寄つては、窓からそつと覗いて見て、家族が大勢なれば一升袋、家族が少なければ五合袋と云つた風に、適度に見計つて袋をドサリと喧嘩最中の眞中に投げ込んでやるのである。

喧嘩の眞最中に何か投げ込まれたので屹驚した夫婦の者は、其袋取り上げて見ると米である、投げ込んだものは誰かと思うて外に出て見ると最早誰も居ない。さうなると之は神樣が下すつたものだらうとなる。すると亭主は亭主で「これは乃公が平素よく働くから神樣が下すつたのだ」と威張る。女房は女房で「いや平素辛棒から俺を褒めて神樣が賜はつたものだ」と互ひに天狗になつて、今迄の大喧嘩は自慢比べの大陽氣に變つてしまふ。此樣子を物陰で隱れ見て居た生神樣の傳兵衞大喜び、いゝ氣持になつて家に歸るのであつた。是れが彼の毎夜の行事の一つで、此陰德は傳兵衞の死後に初めて解つたのであるが、彼の生前には誰も知るものがなかつた。

今日慈善を行ふ多くの徒は、大抵これ賣名の爲めであつて、十圓、二十圓の寄附でも名が出なければ出さないと云ふ有樣である。傳兵衞の心事行爲と比較して、其差も亦甚だしと云はねばならぬ。米國で先年五萬圓を匿名で科學研究所設立の爲に寄附した者があつた。今日になるも寄附者が判明しないのだと云ふ。眞に人道を解し德を重んずるの人は、その行爲に對して、何等の報德を求めないのである。名も賣らなくとも、褒め言葉を聽かなくてもよい、世間に知られなくとも能い、自分で自分の行爲に對して滿足して居るのである。

名匠ロダンの背後には、米國人で有力なパトロンがあつた。ロダンの邸宅と云へば、王侯にも等しき宏壯なもので、その生活振りも亦非常に贅澤なものであつたが、彼れの此の生活費は、此の米人の後援に依るものであつた。しかも、此米人たるや。何をロダンに求めたかと云へば、その巨萬の支出に對して何ものも要求しなかつたのである。彼れはロダンの作品の出來て行くのを

藝術を貴び

知り、出來たと云ふ事を聞くのを樂しみにして居た。彼は世界の爲に此の藝術を貴び、世界の爲にその傑作の遺されて行くことを以て滿足として居た。終に、彼の手許にはロダンの作品の一物もなかつたのである。此眞事こそ眞の藝術のパトロンと云ふべきであらう。是も又陰德の尤なるもので、彼と傳兵衞との間には、その行爲に大小の差異こそあれ、その心事、その德操に於て、相等しいものがある。我等道人の以て龜鑑となすに足るべき逸話である。

第百章　人生

一、死は懼るゝに足らず、人は必ず輪廻轉生するものなるを大覺せよ

△永久に生きる　△靈魂不滅　△エネルギーの波動　△統一的の精神　△記憶の心理
△自我感覺　△死後　△死の裡に生を見る　△誕生　△一物も壞れず

人格は永久不滅である。人格が不滅なる如く人の靈魂も又不滅であつて、幾回となく輪廻轉生するものである。此の眞理を辨へぬならば、信仰は無意義となるのである。故に宗敎に依つて眞の安立を得んとせば、此眞理を悟らねばならぬ。此眞理を能く了解し、人が死ぬべきものでなく

永久に生きる

永久に生きるものであると知つたら、普通に云ふところの、死は決して懼る程のものでもなければ、亦喜ぶべきものでもない。人が生れては喜び、死しては泣く、之は雙方とも誤りである、生れたからとて喜ぶにはあたらぬ。其代り死んだからとて悲しむこともない筈なのである。

靈魂不滅

人の靈魂は永劫に消えるものでないと云ふ觀念を抱くことは、宗敎家として、最も大切の事である。

エネルギーの波動

先づ永生に就て人を躓かすものは、淺薄な科學思想である。科學を徹底的に研究するならば、永生、卽ち靈魂不滅を否定することはないのである。晩近に於ける、科學の泰斗は追々此不滅論に傾いて來る樣になつた。

舊來の淺薄なる科學思想では、心は物質の作用で實體のあるものでなく、只物質のみは實體を有して不滅なりと考へて居る。夫れで心と云ふ單なる作用、單なる過程、單なる附隨現象を發生せしめ且支持して居る身體と云ふ物質の構造が破壞すれば、從つて心も滅すると云ふのである。然るに輓近の物理研究では、所謂物質なるものも決して不變の實體があるのでなく、畢竟エーテルの振動に外ならぬ。而してエーテルなる者も勿論實體があるのでなく、(エーテルには重量なく不可透性もない)、エネルギーの波動である。而して又其エネルギーも勿論實體ではなく。活動の可能性に外ならぬ。故に物質も精神も共に實體のない活動に過ぎないのである、作用に過ぎない

のである、過程に過ぎないのである――よし一次的二次的の區別は立て得らるゝにしても、それで人格(勿論個性を有する)の不滅を論證しようとした試みもないではない、人格の不滅は物理學の法則乃至假設と相容れないものでなく、少くともその可能性がある。而も他に否定の證明はないのである。

凡ての知識は類推の外、之を得る方法はない。類推でない直接の知識としては、我心現象のみである。他人に心があると思ふのも類推である。然るに類推法で考へると、他人だけでなしに、禽獸蟲魚にも程度は違つたものであるにせよ、心があらう。否更に進めて考へるならば、植物にも心があらう。各物質、分子、原子、電子にも其内面の心意生活があるであらう。而して大きく見れば宇宙にも心靈があらう。

統一的の精神

人の死んだ場合、身體を造つて居た分子は離散するが、その一々に心が存續してゐよう。併しその精神不滅は今の問題でない。此身體の生存中にあつた統一的の精神はどうなるかゝ問題である。こゝに二つの答がある。それは消滅すると云ふのと、宇宙の大心靈に合體するといふのである。然るにその全體について二樣に考へられる。一つは個性を失つて大靈と無區別に融合してしまふ、例へば海の中でビール瓶を割れば、そのビールは海水に混じて個性がなくなるやうなものであるといふのであるが(佛敎の不滅論は此思想に近い)、併し是は吾等の信ずる所でなく、我等は何處までも個性が維持されることを望むものである。實際的要求から見ても、人格には個性があると云ふことに大なる價値がある。惡人も善人も大人も小人も馬でも蟲でも死ねば大靈に融合して、而も從つて過去の記憶も歴史もなくなるのであれば、滅亡したものと異るところはない。

記憶の心理

然るに個性の存續は如何樣にして考へ得るか。どこまでも類推法でゆかうとする、フエヒネルは心意現象をその比論の材料にした。曰く物質現象の比論ではビール瓶式になるけれども、物質でない精神に對しては精神現象から類推するのが至當である。既に記憶の心理を考へて見ると、人の記憶現象は、それが經驗當時の對象から離れても、各その個性を維持してゐて、決して相互に混入してしまはない(時を經るにつれて多少の混亂はあるにしても)、例へば味覺の記憶と嗅覺乃至視覺の記憶は相混合することなく、又各感官だけについても、異れる時のものが相混合せずに居る。音樂に於てシムホニーの中に各音色が區別せられつゝ而も合同してゐるのと同樣であると。

然るに類推から見ると物質のある所、必ず精神あると同時に、精神ある處には必ずその物質的基礎がなくてはならない。然らば身體を失つてからの人格の物質的基礎は何處にあるかといふ問題が起る。

フエルヒネは。それは吾々が生存中に外界、卽ち物質界、詳言すればエーテルの狀態に與へた

變化の凡てにあるといふ。我々は時々刻々何等かの影響を外界に與へつゝある。單に考へただけでも腦の細胞が働く、働けばそれが傳はつてエーテルの振動となつて、其狀態に變化を與へるに相違ない。否現に考へることだけでない。例令ばダーウキンの進化論を讀んで思想が變つたとすれば、その人の腦の物質的狀態に變化がある、ダーウキンの死後の人格はダーウキン凡ての行爲に起因する。此種の及び其他のあらゆる外界（他人の腦をも含む）に於ける物質的變化を基礎としてゐるのである。故に死後ダーウキンの身體は地球大で散在的のものである。それはをかしいと思ふ人があらうけれども、一個の分子を組成してゐる各電子と其間の距離とを比較すれば左程に怪しむ必要はない。

然るに、又一つの疑問がある。物質的狀態の變化といふやうなものが人格生活の基礎であるとはヘンではないかといふ。併し、吾々の現在の人格に付て考へて見るがよい。吾々の身體の物質分子は時々刻々に新陳代謝する。八歳の時の身體と七十歳の時のそれとは物質分子そのものは全く別なものである。然るにも拘はらず、八歳の時の我は七十歳の我と、その間に發展變遷はあつても、矢張り同一の自我感覺を有つて居て同一の人格であるではないか。それは何故かといふに畢竟、かの物質分子の變化は時々刻々連續的のものであつて、今日の我れの身體及人格は昨日の我れの身體及人格の繼續又は結果であつて、その間に中斷がないといふ事であらねばならない。然

るに、我生存中外界に與へた變化も常に連續的のものであること明かである。

人の生活には三段ある。胎兒生活の時代と、現在生活の時代と、死後とである。第一の時期は睡眠許りの生活、現代は睡眠と覺醒と交代の生活、死後は覺醒のみの生活である。

而して吾々は現に日々死後の身體を造りつゝあるのであつて、從つてそれに相應する精神生活もあるのであるけれども、今では今の身體が基礎になつて居る精神生活が力づよくて、その爲に蔽はれて前者は充分に顯はれずに居る、所謂潛在意識となつてゐるのである。

人の靈魂は、天地の大神靈より分派されたもので死するや、大神靈の下に一定の期間休息を與へらるゝのであつて、又再び新らしき肉體に分派されて出て來るのである。

眠るは活動せんが爲である。今夜寢るのは明日活動する所の力を得んが爲めである。謂ひ代へれば一日働いた爲に眠るにあらずして、新しき活動力を得んが爲に眠るのである。死も又同じ事である。其身體が老衰するか、又は病氣の爲に役にたたないやうになれば、其身體を棄てゝ新らしき無疵の肉體を得んが爲に大眠りをする、此の永い眠りを求むる爲に古い身體を捨てるのを死といふのである。されば、死は懼る程のものでない。唯親や兄弟や知己に別れるといふ肉體上に於て若干の悲しみはあらう。けれども滅して仕舞ふものでない限り、心配する程のものでないではないか。

死の裡に生を觀る

トルストイは、生に關し謬見を抱くものは、死に關しても亦常に謬見を抱くと言つた。サンユッタ、ニカーヤは、一切諸相を幻影と觀ずる者は死を見ずと云ひ、バハウラーは、其人死の裡に生を觀ると云ひ。又ヘルメスは、人に死あることなし、『死すべき』と云ふ言葉に何の意義なし、死とは破壞を意味するが、而かも宇宙に於て一物も破壞せらるゝことなしと云つて居る。

一切の現身に宿る心靈は永遠に傷害すべからざるものである。故に吾人は一切の生類の生死に對して涙を濺ぐを要せず。賢者は生命あるものをも生命なきものをも憂へず、總て吾等は曾て存在せり。之より以後も存在せざる時なきものである。

誕生

地上の總てのものに誕生といふことなく、又死滅によつて萬物空に歸すると云ふことは絶對にないのである。唯相集つて居る質料の結合と離散とあるばかりである。畢竟誕生と云ふは人間の心に慣れたる一の空しき言葉であつて何人も死ぬことはないのである。唯死するが如く見ゆるのみであつて、生存する處を異にするのみである。洵に誕生といふことは、本體（卽天地大神靈）より小なる實體に移ることであつて、死とは反對に小なる實體より本體（天地大神靈）に移ることである。

一物も壞れず

世にある一切のものは、一個の例外もなく、皆增大若くは減小の運動の座である。動くところの一切のものは總て生命のあるもので、而して宇宙の生命は一個の必然なる生成である。一物も壞れず、又一物も失はれず、故に一切は不死であり永生である。物質、生氣、智慧、呼吸、心靈、總じて生命ある存在者を組織するものは悉く死ぬものでない。

總てのもの人の作りしと云ふものは何ものもないのである。こは皆過去現在未來を通じて、自ら燃え、且再び自ら消ゆる、永遠の生命ある火であつて、卽ち神の力である。

故に夕に死すとも、朝に道を聞き、神の威力の偉大なることを知り、死せざる本來の眞理と輪廻轉生の道理とを會得し、茲に安心立命を得て、愉快に闊達に生存し、天地大神靈の微妙なる攝理を感謝し、自己の滿足を得ねばならぬ。

思想統一　聖道　終

大正十年十月十五日印刷
大正十年十月廿二日發行

定價金參圓五拾錢

著作者　淺岡信堂
發行者　大葉久吉　東京市日本橋區本石町二丁目拾五番地
印刷者　笠間音次　東京市芝區愛宕町三丁目二番地

印刷所　東洋印刷株式會社

發行所　東京市日本橋區本石町二丁目
振替口座東京二八〇番　東京寶文館
大阪市東區淡路町四丁目
振替口座大阪四三番　合資會社大阪寶文館

關西專賣

東京寶文館發行書目

東京帝國大學講師 文學士 松浦一著

生命の文學

布裝全一冊
定價金貳圓五拾錢
送料金拾貳錢

文學と人生との眞義を此の尊き文字に求めよ

本書は著者が東京帝國大學に於て文學概論として講演せるものに基き上梓せられたるものにして、獨特なる高遠の識見を以て無量無邊の生命を文學の神髄より探り來り生と死との爭鬪の巷に眞に生くべき道を示し、以て人間の最も威嚴ある生活の道を明にせり。一句一言悉く文學と人生との經典たり。而かも警句に富める詩的なる著者の文章は口語なれども玉の如く又焰の如し

大僧都 橘泰善 著

自我偈 俗解

布裝全一冊
定價金壹圓八拾錢
送料金八錢

法華經の眞髄に觸れんと欲する者は讀め

本書は橘師が出雲國平田町に於て、法華會員の需に應じ、法華經の骨髄たる如來壽量品第十六卽ち自我偈を最も平易簡明最も通俗的に講演せられたるを上梓せるものなり。自我偈の讀方より始まりて難語句の解釋每句の俗解に及び、さしもに難解の自我偈を何人にも容易に了得せしめたるは本書の特色なり。洵に佛典研究者に取りて無二の寶典と謂ふべし。

朝永博士の二大名著

京都帝國大學教授 文學博士 朝永三十郎著

近世に於ける「我」の自覺史

布裝全一冊
定價金貳圓貳拾錢
送料金拾八錢

本書は筆を「ルネッサンス」に於ける「我」の發見に起し、神秘主義宗教改革カント「ロマンチック哲學」の背景を敍して現代の新理想主義殊に西南獨逸派の哲學に結ぶ。皮相的なる理想主義の紹介淺薄なる自覺熱の流行する今日新理想主義の眞精神を知らんとする者は請ふ本書を繙け。卷末には註解を添へたり。

京都帝國大學教授 文學博士 朝永三十郎著

獨逸思想と其背景

布裝全一冊
定價金壹圓
送料金六錢

本書は獨逸哲學を一貫せる中心特徵を捉へ之を標準として敍說したる中世より現代に至る迄の獨逸思想の概觀史なり神秘說を背景として「理性」の哲學を敍し「理性」の哲學を背景として「人文國家」の觀念軍國主義的思想新理想主義等の起原と基礎とを說く。著者の學殖と敍說の明快とは既に定評あり、玆に贅せず。

東京寶文館發行

哲學研究者必備の名著

京都帝國大學教授 文學博士 朝永三十郎著

增訂 哲學辭典

布裝全一冊
定價金參圓八拾錢
送料金拾八錢

從來我國に於ける哲學の辭典は或は局部に偏し、或は單に原譯兩語を對照せるものに過ぎず。著者茲に見る所ありて本書を公にす。本書は純正哲學宗教心理倫理等は固より、生理物理精神病學等に至るまで、哲學の全豹に亘りて汎く術語を蒐集して簡約平易なる解釋を施し、各語には必ず獨・英・佛の原語を附し又必要に應じては希臘・羅甸・希伯來等の原語をも附したり。故に如何なる難解の語に遭ふも一たび本書を繙かんか、立所に釋然自得するを得べく、洵に斯界無二の寶典たり。純正哲學及哲學的科學に關する述作日に盛なる今日敢て斯學研究者の一讀を勸む。

發行所 東京市日本橋區石町二八〇番 振替口座東京 寶文館

324
656

終